

麦と毒麦

田 村 光 三

私には年来の未解決の問題がいくつかある。そのひとつは、何故良い意図をもって始められたことが、しばしば結果的に悪い果実を結ぶのであろうか、ということである。それは「歴史のアイロニー」だとか、この世は元来「不条理」なものだとかいっても、答えにはならない。

アテネの都市国家の昔から今日の福祉国家にいたるまで、人類の幸福をめざさない政治経済体制はなかった。資本主義も共産主義も、元来は個人の自由な発展と人類の福祉を旨としたものであったが、今日の世界史的現実、その当初の意図からは想像もつかない程の悪しき果実を生み出す結果になっている。

自由な経済活動を基盤にした生産力の限りない成長は、人々の生活をいよいよ豊かにする筈であった。ところがその成長は、生産物の浪費と資源の乱獲なくしては不可能となり、ついには現今の、南北問題、戦争、環境破壊といった、もはや不可逆的ともいえる程の諸問題を宇宙の規模で引きおこすこととなった。

他方、資本主義の病理をつき、正義の旗印を勢いよくかかげて、資本の抑圧体制を止揚して「自由の王国」の到来を約束した社会主義・共産主義も、人権問題や階級問題を解決するどころか、かえって、強権的独裁と軍部官僚優先の病的体制を生み出して、働く民衆の生活を極度に抑圧しつづけてきた。歴史上生起したほとんどすべての「革命」の運命も、この轍をふんできたといつてよい。

一体何故このようなアイロニーが歴史上くりかえし起きるのであろうか。

聖書に次のようなたとえ話がある。

ある人が自分の畑に「良い種」を蒔いておいた。ところが、芽がはえて実を結ぶ頃になると、麦の中に毒麦があらわれてきた、というのである。(マタ

イ十三・24—30)

同じような話が旧約の預言の中にも見られる。

ある人がひとつの畑をもっていた。それに「良いぶどう」を植え、見張小屋を建てて、その収穫の日をまっていた。ところが、「結んだものは野ぶどうであった」というのである。(イザヤ五・1～2)

マタイの「麦と毒麦」のたとえには、すでにひとつの解説がついていて、「人々が眠っている間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った」、つまり、麦の中に毒麦を混播したのは「敵のしわざ」だというのである。話がそれまでであれば、論理は至極幼稚に見えるかもしれない。実はマタイのたとえの教訓の重点は、そのあとに続く末尾の部分にあるのだが、ここではひとまずこの「幼稚」な論理の部分に限って考えることにしたい。

この論理は「敵」、つまり自分たちとは異質的な者が、自分たちの意図に反するものを意識的に投入したという単純な発想である。「単純な」とはいても、実は現実の歴史の中にはこのような「単純な」発想によって極めてシリアスな事例がひきおこされる場合が意外と多いのである。つまり、何か自分たちのまわりに不都合なことが起きると「敵」すなわち犯人の探索がはじまる。正統派とか正義の味方と自称する人々による魔女狩りや宗教裁判や人民裁判が、熱狂的にとり行われる。間もなくその中から一匹の犠牲の小羊が裁きの座にあげられて肅清という儀式が続く。一件落着である。

ところが、である。問題はそう「単純」ではない。また何年か、何世代か後には、更に同じような事件がおこる。歴史はこの犯人探しと肅清の繰り返しではなかったのではなからうか。それでも「毒麦」や「野ぶどう」はわれわれのまわりからなくならないのである。更に深刻なことは、そうしているうちに「正義」そのものであった筈の正統派体制自体が、丁度キャベツのように「内側から」腐っていくのである。

一体、何故、意図せざる悪しき結果が、われわれの当初の良い意図を裏切って生じるのであろうか。どなたか教えていただきたい。